

## 保名の近代

古井戸秀夫

六代目尾上菊五郎は、「保名」で、春の気分を踊ろうとした。恋ゆえに狂う、若い男の気持ちを踊ろうとした。そこに九代目団十郎にも、父五代目菊五郎にもない、近代の「保名」が生れた。

菊五郎が、「保名」を踊ろうと思ったのは、大正7年(1918)4月22日、有楽座で開かれた藤間静枝、のちの藤蔭静枝の第三回藤蔭会で、新橋路考が踊る「保名」を見たときだとされる。そのときの舞台背景を、和田英作画伯の指導で、若き日の田中良が描いた。

「保名」の背景は、菜の花に燃えてゐる春の感じを出したものださうで、背景一面を黄色に塗り、その裾の方を緑色にぼかしたものである(中略)緞帳があがると黄色一面にうまく電燈の光線が柔かく映えて、一寸シャンペンサイダーを飲んだやうに、気がはっきりとする。そして美人を眺めてゐる時のやうに、眼がまぶしさうになる。これが即ち春の感じださうであるから、これだけ感じた人は想像力をもう無遠慮に引き出されて了つたのである。云ひ換ふれば、栄作画伯の魔術にかゝつてゐるのである。(せんのすけ「第三回藤蔭会を見る」新演芸6月号)

菊五郎も、田中良の背景の魔術に掛った一人であった。菊五郎、数え年34歳。一つ年かきの田中良は、翌大正8年、欧米視察の旅に立つ。帰国後、菊五郎は、田中良の舞台装置で「保名」を踊る。大正11年2月、市村座の舞台であった。それまでの、九代目や五代目が踊った「小袖物狂い」の保名は、キリにカラミの奴の所作ダテが付く、狂乱特有のアクロバティックな動きをみせる、派手な所作事であった。六代目は、それを孤独な青年の恋に変える。

もうすでに言ひ古され、ほめ尽された保名、今更廻らぬ筆で賛美しようなど、思つても、初まりませんけれど、華やかな中の云ひ知れぬ寂しい気分、涙の頬を伝ふ時、私の魂は全く奪はれて、舞台のそのやうにたゞうつ、なく。……

菊五郎の新しい「保名」の印象は、新演芸三月号の「読者の世界」に寄せられた「も、よ草」という乙女の、このような感想となってあらわれる。菊五郎は、田中良の黄色で象徴された春の世界で、孤独な若者の恋を踊ろうとしたのである。象徴された春の景色で、自然な人間の感情を踊る、ロシアンバレエに通じる近代の視点がそこにあった。

菊五郎は、かつて一高の学生たちと「黒猫」という同人誌を発行している。明治から大正・昭和の大学生にとって、恋に悩む若者の姿に時代の共感があった。ライバルの二代目左団次が、岡本綺堂の『鳥辺山心中』で、「清き乙女と恋をして」と謳いあげたのも大正という時代であった。

一方、作家の近松秋江は、失恋ゆえ狂乱する菊五郎の「保名」に、文覚上人や滝口入道とは違う共感を覚えつつも、「私共には——本来最も興味を持つべき失恋狂の、微妙なる心持ちが、真実に出てるものとは思へない」(新演芸・大正11・3)と切り捨てる。私小説の近代文学が追い求めた恋とは違う、近代詩の叙情の系譜に菊五郎の「保名」があることがわかる。

菊五郎は、明治43年10月、26歳のとき、歌舞伎座で「桐一葉」の渡辺銀之丞に扮した。このとき菊五郎は、作者の坪内逍遙から、銀之丞という男は、わがままが五分、教育の足りないのが三分、短気が一分、馬鹿が一分だといわれ、一晚中寝ずに考えて、ある一人の人物に思いあつたという。その人物を思いながら化粧をし、扮装を考えたという(「私の銀之丞」歌舞伎125)。リアリズムの単純な演技術にもとづく役作りをした。失恋ゆえ入水して死ぬ銀之丞は、逍遙がシェークスピアのハムレットとオフィーリアをもとに創り出した、近代の新しい若者像であった。そこに、多くの若き知識人が共感し、伝説の舞台となった。

九代目の保名も、かつて仮名書魯文の『葉武列土倭錦絵』で、葉叢丸ことハムレットにみだてられたが、それは江戸の狂乱物の系譜を引く佯狂のハムレットであった。恋ゆえに悩む、もう一つのハムレット像は、六代目の保名に転生する。

いずれにせよ、近代という時間に醸成された菊五郎の「保名」は、近代古典として、いま私たちの目の前に存在している。